
モンハンほのぼの話

スパミリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンハンほのぼの話

【Nコード】

N9372R

【作者名】

スパミリオン

【あらすじ】

自称師匠のハンターと、黒い毛並みのオトモアイルーと、薄紫色の髪をした女の子のお話。モンハンをモデルにしながら、狩りが出る予定が全くないです。

1、出会い

ある1人のハンターと、そのハンターのオトモアイルーが燃え上がる家をバックに困っていた。

ハンターの姿は金色に輝く鎧を全身に着込んでおり、よほどモノを知らない人以外が見れば、このハンターがかなりの腕前だというのが分かる。

対して横にいるオトモアイルーの装備は特注品なのか、誰も見たこともない形で、緑色に輝く、ドラグライト鉱石でできた刺々しい鎧を着込んでおり、素手で触れば確実に怪我をする危険な鎧を着ていた。

その新米ではあり得ない二人が困っていたのは、強力なモンスターに出会ったからではなく、ただいまハンターの抱いているモノのせいだった。

「なあ、どうしようかな？」

「拾ったからには、頑張って育てるニャ！」

「まあ、親類が見つかるまでは預かるか……」

「当たり前ニャ！」

「ふーむ……応急手当ては済んだとはいっても怪我人だし、急いで帰るかな」

「了解ニャー！」

そして、小さな女の子を抱いてたハンターは、全身鎧を着込み、

背中には大剣、両手に女の子を抱いているとは思えない速度で走り出した。

「ニャーニャー！ ギルドにはニャーが連絡しとくニャー！」

オトモアイルーは、自分のご主人の返事を待たずに、地面に潜って姿を消した。

「行ってこい、めんどろ事は任せた！」

ハンターも、一応振り向いてオトモアイルーに向かって返事をしたが、走る速度を少しも落とさずに、自宅に向かって走り続けた。

ハンターとオトモアイルーが去った後には、未だに燃え続けている家だけが残されていた。

……………

…

家に帰って女の子をベッドに寝かせたハンターは、慌ただしく家の中を駆け回っていた。

「これをここに置いて……コイツらは頑張っただけ吊るすかな……」

ハンターが自宅で頑張っているのは、倉庫からモンスターの精巧な模型を取ってきて机の上にならべたり、同じく倉庫から取ってきた、丸みをもった、デフォルメされた柔らかい素材のモンスターのぬいぐるみを、天井に大量に吊るす作業だった。

「ふっふっふ。出来た！　今までお蔵入りしていた、模型やぬいぐるみを全部飾ったぜ！」

天井に吊るしているぬいぐるみ達は、空を飛べるモンスター達だけで構成されており、机の上にならべてある精巧なモンスター達は、リオレイア等の有名なモンスター達と、ヒプノックといったマイナーなモンスター達がところ狭しとならべてあった。

一通り見渡したハンターは何かに気が付いたのか、急いで倉庫に走って行った。

「しまった〜！　こういう時にアレを飾らないでどうするんだ!?」

ドタドタとうるさい音を立てたが素早く帰ってきたハンターの手には、長い長いモンスターのぬいぐるみが、三つ握られていた。

三つあるぬいぐるみは形こそまったく同じだが、色が三つとも違っていた。

一つは黒。一つは白。最後の一つは赤黒い色をしていた。

「よしよし、まだ起きてないな」

ハンターはベッドに寝かした女の子が寝ているのを確認したら、長い体のモンスターを吊るし、三つセットにする事でちょうど部屋を一周した。

長い体のモンスターは、東洋の龍によく似たモンスターで、多数ある角。四本の足でよつんばいになることはあっても、大抵後ろ足の二本だけで立っており、大きな翼を使って空を飛んで移動をし、

一流ハンターでも見たことが無いのが普通の伝説のモンスターだった。

「はっはっは！ 出来た〜！ 出来たぞ〜！ ミラボレアス・リング！」

しばらくハンターが笑っていたら、その音のせいで起きたのか、ベッドに寝かした女の子が目覚めており、上半身を起こしてハンターを見ていた。

「だ〜れ〜？」

「む！ 何時の間に!？」

わざと大袈裟に反応したハンターは上半身だけをひねって女の子の方を向き、次に下半身を上半身に合わせるように回転させて、上半身と下半身が揃ったらその勢いを殺さないでもう1周回ってから止まった。

「俺の事は師匠と呼ぶがいい！」

自称、師匠のハンターは右手親指で自分を指差し、女の子の反応を待ってじっとしていた。

「……ちちよう？」

「師匠！」

「ちちよう！」

「師匠!!」

「ちちよう!!」

「し・しょ・お！」

「ち・ちょ・お！」

「……………」

しばらく黙って見つめ会う二人。

「ちちょうでいいです……」

「ちちょう♪」

師匠は女の子から目をそらし、ガックリと崩れ落ちた。

師匠が崩れ落ちていたら扉が開き、オトモアイルーが帰ってきた。

「ニャー。ただいまニャー」

「おお！ いい所に！」

復活した師匠は帰ってきたばかりのオトモアイルーを捕まえて、

「手、手が……!?」

素手で刺々しい鎧を掴んだ師匠の両手は、血で真っ赤に染まった。

「いってえ……！」

手を押さえながら床を転がった師匠は、机にぶつかって止まった。

「ニャ……アホかニャ？ それとギルドから手紙ニャ」

何処からともなく手紙を出したオトモアイルーは、手紙を広げて師匠に見えるようにした。

「うぐおおお……て、手紙？ え〜と…」

師匠は手紙に血が付かないように端を摘まんで持ち、しばらく静かに手紙を読んでいたら、ため息をついて手紙を机の上に置いた。

「あゝギルドから報酬受け取ってくるわ」

「ニャー！ 了解ニャー！」

「その子は任せた」

手に包帯を巻いて応急処置をした師匠は籠手を着け、入り口に立って掛けてあった大剣を背負ったら走って出ていった。

「ニャー。まずはニャーの本名はニャーゴニャーゴゴニャー！ でも、本名は人間には分かり難いから、ご主人に付けてもらった名前があるニャー」

二本足で立ち上がったオトモアイルーは兜をとり、床に置いたら頭を一回下げた。

「ご主人に付けてもらった名前は、アイルー君メラルー君ニャー！ 略してアル君ニャー！」

「あるくん？」

「そうニャ、アル君ニャ。お嬢さんの名前は、ニャンて名前かニャ？」

「わたちの、なまえわ〜……」

そこまで言ったら、首をかしげて止まる女の子。

「ニャ？」

同じように首をかしげて止まるアル君。

「なんていうの？」

「ニャニャ！？ 名前ニャ！ 名前ニャ！」

「なまえ……わかんない」

「ニャ……ニャンだか面倒な事になったニャ……」

真っ黒な毛並みのアル君は、包帯が巻かれた女の子の薄紫色の頭を見つめて止まり、ため息をついた。

「ニャ……記憶喪失かニャ？ だとしたら、怪我人の頭をグリグリしたご主人のせいニャね」

その後アル君の懸命な努力により分かったのは、女の子は親兄弟の事は覚えていないが、モンスターの名前は色々覚えているという事だけだった。

「レイアと、レウスが、ガッチンコー」

女の子は机に並べていたレイアとレウスを両手でまとめて持ち、床に叩き落としては拾って、を繰り返していた。

「ニャゝ…：…大変な事になったニャね…：」

2、ご飯

「ただいまーおお！」

あれからしばらくして帰ってきた師匠は、我が家の変化にびっくりして入り口で止まっていた。

家の中を見て最初に目がつくのは壮大に荒れた床で、床には机の上に並べていた特注品である、モンスターの精巧な模型があちこちに転がっていた。

普段なら、こういう事態に成ったら文句を言いながらも片付けてくれるアル君は、空けた机の上で、女の子と1つの皿を巡って押し合っていた。

「いらなーい」

「だめニャ！」

「いらなーい」

「食べるニャ！」

「いらなーい」

「食べなニャイとだめニャ！」

「いらなーい」

「だめニャ！」

「いらなーい」

「食べるニヤ！」

「いらなーい」

「ちゃんと食べるニヤ！」

「いらなーい」

「食べたらずーとが待ってるニヤ！」

「いただきます」

「ニヤニヤ……やっとな食べてくれたニヤ」

1つの皿を巡った押し問答が終わったのか、女の子は静かに皿の中身を食べ始め、師匠に気が付いたアル君が机の椅子から飛び降りて、師匠に頭を下げた。

「ご主人。お帰りニヤ。すぐにご飯を持ってくるから待ってるニヤ」

頭を上げたアル君は師匠の返事を待たずに、奥の部屋に四本足で駆けていった。

「あーうん？ 片付けないのか？」

床に散らばる、自分で注文して作ってもらった模型に目を落とし、足の踏み場がギリギリだったので、足で左右にずらしながら机にたどり着いた。

「うまいか？」

師匠は女の子に向かって話し掛けたのだが反応がなく、女の子は静かにご飯を食べているままだった。

「……………」

机に両肘をついて女の子を見ていたら、アル君ができたての料理を担いで現れた。

「お待ちせニャー」

背が足りないアル君は、トレイに載った料理を投げて机の上に乗せて、床に散らばった模型を片付けだした。

「いただきます」

パン！ と勢いよく手を合わせた師匠は凄い勢いで食べ始め、一分も掛けずに食べきった。

「ごちそうさんつと」

再び両手を合わせた師匠がアル君を見ると、部屋の端に模型で出来た山を作っていた。

「アルくん。金銀は残しといてね」

「ニャー？ 先に言って欲しかったニャー！」

一瞬すべての模型と一緒に持ち上げたアル君だったが、師匠の言葉で床に下ろし、模型の山に頭を突っ込んだ。

「ニャーニャー痛いニャー！」

模型の山から聞こえるアル君の声を無視した師匠は、いまだに食

べている女の子に話し掛けた。

「どうよ、アル君の料理は。うまいだろう？ 美味しいだろう？」
頭ナデナデして良いかい？」

そう言いながらも、師匠の手はすでに女の子の頭に伸びていてた。

「はいーナデナデーナデナデーナデナデー」

薄紫色の髪の上に手を乗せて、反応しないのを良いことにしつこく撫でてみた。

「な〜で〜な〜で〜」

「ニャー！ 見付けたニャー！」

突然模型の山から出てきたアル君の手には、金火竜と銀火竜の模様が握られていた。

山から出てきたアル君は師匠に近付き、机の上に金銀を置いたら、かわりに食べ終わっている師匠の皿を回収して、奥の部屋に走って行った。

「アウチ！ 本人どころか飼い猫にも無視された！？」

叫びながら師匠は両手で頭を抱えてナデナデを止めたら、奥の部屋から丸くデカイ中華鍋が飛んできて、師匠の後頭部に直撃した。

「！！ ―――っったぁーい！」

「飼い猫じゃないニャー！ オトモアイルーニャー！」

奥の部屋から帰ってきたアル君は、自分で投げた中華鍋を回収し、中華鍋を持ったまま師匠の頭に飛び乗った。

「? 何してんの?」

「ニヤ? 良い足場があったか、乗ってるだけニヤよ?」

「えい、降りなさい。俺の頭はマトでも足場でもねえ!」

「ニヤ、それくらい分かってるニヤ」

「じゃあ何で乗ってんだ!?!」

「ニヤーの分の椅子が無いからニヤ」

「なら机に乗れ! 俺に乗るな!」

「アホかニヤ! 机に乗ったらダメニヤんて基本ニヤ!」

師匠やアル君の二人が叫んでも今まで反応しなかった女の子が、カラに成った皿をアル君達の方に押してきた。

「デザート。ちょうだい」

「ん?」

アル君が、頭に乗っているのが分かっているながら首を傾げる師匠。

「ニヤニヤっと。確かにちゃんと食べたみたいニヤね」

師匠が首を傾げたのに合わせてアル君が師匠の頭の上を移動し、皿がカラなのを見たら、皿を回収して師匠の頭の上からやっと降りた。

「ちちよー。ちちよーも、デザートと、食べるの?」

やっと頭から降りたアル君を目で追っていた師匠は、女の子に話し掛けられたので、頭を正面に戻した。

「デザート？　まあ、アル君が作る物は何でもうまいしな。食べるぞ」

「うん。じゃあ、分けて、あげるね♪」

「んん？」

さっきと反対に首を傾げ、腕を組んでいたら、アル君が何かを持って帰ってきた。

「はい、どうぞニャー」

アル君が師匠の頭の上に飛び乗り、持ってきた皿を女の子の前に置いた。

皿の中身は、四角く切られた一口サイズのリングで、フォークが1つリングに刺さって皿に入っていた。

「いただきます」

嬉しそうに、美味しそうに女の子は食べ始め、しばらくして師匠の視線に気が付いた女の子は、フォークでリングの欠片を刺して、師匠の方に差し出した。

「ちちょー。たべる？　いっこだけなら、たべていいよー」

「一個だけですか……」

師匠はリンゴの欠片が最低十個を超えているのを見て、アル君のボディを突きながら返事をした。

「いっただけだよ。のこりはわたちのー」

まだ食べると言っていないのに、女の子は師匠の口にグリグリとリンゴを押しつけ、「たべるゝ？ たべるゝ？」としつこく繰り返していた。

「食べるよ。ちょうだい？」

師匠が口を開くと、リンゴ付きフォークが師匠から離れた。

「うん？」

師匠はリンゴが届かない所まで下がったのを見て、アル君をついでに落とす為に、大袈裟に頭を傾げる。

「ニヤニヤつとニヤ！」

アル君は師匠が首を傾げたのに合わせて飛び上がり、師匠の頭の上に着地した。

「降りろ！」

「嫌ニヤ！」

「うふふふふゝ♪」

すっごいニコニコした女の子がリンゴ付きフォークを突きだし、師匠が口を開くとフォークを下げた。

「なぜえい!?!」

「ニヤッハッハッハ!」

師匠は女の子を見ながら頭の上のアル君に足払い……手払い?

……師匠は右手でアル君の足を払って落とそうとしたが、アル君は華麗にバク宙を決めて師匠の手を避けて、師匠の頭の上に着地して両手を上げた。

「避けんな!」

「ニヤハハハハ!」

「どろどろ」

また女の子がフォークを差し出してきたが、師匠が動きを見せると素早く下げた。

「なんでやねん!」

「ニヤニヤつとね」

「んふふふふ」

師匠は頭を勢いよく下げてアル君を空中に逃げさせ、着地を狙って手を伸ばしたが、アル君は身軽なのを利用して、天井から吊るしているぬいぐるみにしがみついていた。

女の子は引っ込めたリングを食べたら次のリングを突き刺し、「あゝん」と言いながら師匠に差し出したが、師匠が前を向いただけでリングを引っ込め、自分の口の中にリングを入れた。

「降りてこい! いや、やっぱいい! 降りなくていい!」

「降りるニヤよー降りるニヤよー。ご主人の頭に降りるニヤよー」

上を向いて、アル君が降りてきたら叩き飛ばすつもりで師匠と、ぬいぐるみに掴まってゆらゆら揺れて、師匠の隙を伺うアル君。ニコニコしながら師匠とアル君を見て、リンゴを食べ続ける女の子。

師匠とアル君の勝負は、女の子がリンゴを食べ終わるまで続いた。

3、ぐるぐる♪

「朝ニャよ〜朝ニャよー…」

アル君は中華鍋をオタマで叩いて騒音を出しながら、師匠の部屋の扉を開けた。

アル君が師匠のベッドを見るとベッドの真ん中が膨らんでいて、布団のどこからか体が出ていないので、師匠が起きるのが嫌で布団にくるまっているように見えた。

キラーンと比喻表現ではなく中華鍋が外の光りを反射して光り、中華鍋とオタマを机に置いたアル君は、少し下がって助走をつけたら飛び上がった。

「起きるニャー！」

アル君の狙いは布団の真ん中。空中で何回転もしたアル君の飛び蹴りが布団の真ん中に炸裂した。

アル君は師匠を踏みつけて起こすつもりだったが、布団を踏んだアル君の体は布団に沈みこんだ。

「ニャニャ〜からニャ！？」

膨らんでいた布団は師匠の作だったようで、布団の中には誰もいなかった。

「とった！」

アル君が布団に埋もれていると、ベッドの下から凄いスピードで出てきた師匠は、布団でアル君を包み込み、サンタの袋のように背負った。

「アル君ゲットー！」

師匠はニャーニャー聞こえる布団を持ち上げて、ぐるぐると振り回した。

「はっはっはー！ 回れ回れー！」

「（ニャーやめるニャよー目が回るニャよー！）」

しばらくぐるぐる回して布団が静かになったら、師匠は布団をベツドに投げてつけた。

「ニャー……ばた」

布団から解放されたアル君は、少しふらふら歩いた後にばたと言いながら倒れ、片手を震えながら上に伸ばしていたが、片手が力尽きた後は動かなくなった。

「よし。勝った。……今日のご飯は何だろうな〜っと」

師匠はアル君を無視して部屋を出て、机の上に置いてあった朝飯を素早く食べた。

師匠が朝飯を食べて立ち上がったら、くいくいと下から引っ張られた。

師匠はアル君がもう復活したのかと思いながら視線を向けたら、アル君ではなく、女の子が引っ張っていた。

「わたちも」

「……はい？」

女の子はもう一度師匠を引っ張ったら、アル君を指差し、

「わたちも」

「……いや、分からん」

師匠の返事にあからさまに機嫌が悪くなった女の子は、音量を上げてもう一度。

「わたちも、ぐるぐるしてほしい！」

「ぐるぐる？」

「ぐるぐるって、さっき、ちちようが、あるくんにしてた、わたちも、ぐるぐるって、してほしい」

女の子は両手をぐるぐる回し、終いには体ごとぐるぐる回り出した。

「んゝもしかして、さっきアル君を布団で包んで振り回していた、アレをしてほしいのか？」

「ぐるぐるって、してゝ」

女の子はぐるぐると言いながら回転し、回転に合わせて伸ばしていた両手で師匠をペシペシ叩いていた。

「ぐるぐるゝぐるぐるゝ」

「いやいや、待て待てお嬢。危ないからお嬢には出来んよ」

「ぐるぐるゝぐるぐるゝ」

「だめだって。後でアル君ハンマーで叩かれる」

「ぐるぐるしてゝぐるぐるしてゝ、わゝたゝちゝもゝ」

「むゝしつこい…」

師匠は困った顔をしていたが、女の子は何時の間にか笑顔になってぐるぐる言い続けていた。

「ぐるぐるゝ、んふふゝ」

「よし。こいつでがまんしてくれ」

師匠は女の子の両脇に手を入れて持ち上げ、両手を水平に伸ばして回転した。

「ぐるぐるゝ」

女の子は楽しそうにぐるぐる言いながら笑っていた。

「ぐるぐるゝ」

十何回転もした辺りで目が回ってきた師匠は、女の子を床に降ろして椅子に座り込んだ。

「やっぱ、これ以上は危険だ」

しかし、師匠と違ってまだまだ元気な女の子は、師匠を引っ張って一言。

「もういっかい」

「うえ!？」

師匠はかなり嫌そいな顔をしたが、それをまったく気にしない女の子は笑顔のままもう一度。

「もういっかい。ぐるぐる〜ってして」

「いや、これ以上は俺が危険だ」

「もういっかい〜もういっかい〜。ぐるぐる〜って」

「いやいや待て待てお嬢。休憩、休憩を!」

「もういっかい〜もういっかい〜」

師匠の言葉が聞こえていないかのように女の子は「もういっかい」を繰り返し、師匠の服をぐいぐいと引っ張っていた。

「うぬ〜……」

「もういっかい〜もういっかい〜」

初めは片手で少し引っ張っていたただだったが、今や女の子は両手を使って服に掴まり、体重をかけて引っ張っていた。

「もういっかい〜もういっかい〜。ちちよう〜、もういっかい、してよ〜」

「分かった。やるから!」

「わ〜い♪　ぐるぐる〜♪」

根負けした師匠は女の子を持ち上げたら、何故か両足をばたつかせる女の子。

「ぐるぐる♪　ぐるぐる♪」

しかも両手は師匠の腕を何故か叩き、歌うように「ぐるぐる」を繰り返していた。

師匠が回転を初めても女の子の足と手は止まらず、師匠はバランスをとるのに力を注いでいた。

「ぐるぐる♪　もっと、もっと♪」

「ぐふ……気持ち悪い……」

いくら回転しても元気な女の子と違い、師匠の限界は近かった。

「ぐるぐる♪　ぐるぐる♪」

「お嬢。もう無理、吐きそう……」

師匠は女の子にギブアップ宣言をして回転を緩めたが、女の子は師匠の腕を叩いて回転の催促。

「もっと、できるでしょ！　がんばりなちゃい！」

「ええ……何それ？」

師匠が気持ち悪くて回転を緩め、その時肘を曲げて休憩しようとしたせいで近くなった女の子は、師匠の腹に蹴りを入れた。

「ぐふぁ!？」

「まだ、ぐるぐるって、して！」

「ムリムリ！ 吐く！ 助けてアルくん！」

師匠がアル君に向かって助けを出したら、小さくアル君の声が聞こえた。

「がんばるニャー。ニャーは目が回って動けないニャー」

「アルくん！？」

「ぐるぐるして！」

師匠が回らずに止まっていたら、女の子の蹴りが再び師匠を襲った。

「ぐは！」

師匠は大袈裟にリアクションを取ったら女の子を床に降ろし、床に転がって腹と口を押さえた。

「ちちよー、ぐるぐるしてよー」

床に降ろされた女の子は師匠を揺さぶり、師匠の気持ち悪さを加速させた。

「お嬢。止めてー！」

「ちちよー、起きてよー、ぐるぐるしてよー」

ゆっさゆっさと師匠を揺らしていた女の子だったが、反応の薄い師匠に飽きたのか、よじ登り始めた。

「よいちよ、おっとと。あわわわ………できた♪」

横向きに倒れて丸まり、腹と口を押さえた師匠に乗った女の子は、机に置いていた手を離して立つ練習を始めた。

「おつとと……あ！ あぶないあぶない、ふう〜、よいちよつと」

「ちょ！？ 何してんの！？ 腹が痛い痛い痛い！ グリグリしないで〜！」

師匠のことを気にしない女の子は、たまにつま先立ちになったり、片足立ちになったりしているので、その度に師匠の腹に足が食い込んだ。

「ニャー復活ニャー！」

復活したアル君は師匠の部屋から飛び出してきた、くるくると三回転したアル君は、師匠の側頭部に着地した。

「おいーアル君！ 俺にとどめ刺しに来たのか！？」

「その通りニャ！ ぐるぐるの怨みをここで晴らすニャー！」

アル君は師匠の頭の上でスキップを始め、その度に師匠の頭が床にぶつかった。

「いたたたた！ 二人共痛い！ どっちも止めて〜！」

「ふっふう〜ん。できた♪ おつとと…」

女の子は、一瞬だが手を離して立てた事が嬉しそうだったが、何時までもチャレンジを続けているので、いまだに師匠の上に居

座って……立ち続けていた。

その後師匠が復活し、アル君を捕まえた師匠がアル君をベッドに投げつけるまで、女の子のチャレンジ精神は失われなかった。

「ちちよー、私たちも、私たちもー、あるくんみたいに、ぶーんとびたいー」

「流石にがまんしてくれ!？」

4、手紙

「ご主人！ 手紙ニャよ」

外から帰って来たアル君は片手に手紙を持って家に入り、師匠の目の前まで四足で走って行ったら、手紙を師匠に差し出した。

「おう。ありがとう」

師匠は手入れ中の武器を置いて、片手を上げながらアル君に返事をし、手紙を受け取ったらすぐに開いて中を読みだした。

そして、師匠が武器の手入れをするのを見ていた女の子は、手紙を読みだした師匠の服を引っ張った。

「ちちょ、わたちも、みる」

「ふむふむ」

師匠は女の子を完璧に無視しながら手紙を読み続け、女の子は師匠の服を引っ張りながら「わたちも」を繰り返していた。

「ニャーも読むニャ」

アル君はその場で飛び跳ねて師匠の頭の上に着地し、師匠の頭の上から手紙を覗きこんだ。

一瞬間をしかめた師匠だったが、手紙から視線を動かさずに読み続けていた。

「ニャー……ご主人。何を言ったのかニャ？」

「みくせくてく」

手紙を読んだアル君は、省略された内容のせいで意味が分からなかったから、師匠の顔を上から塞いで質問をした。

「そうだな。簡単に言うと、楽をしようとしたが却下された」

「わくたくちくもく」

ちなみに手紙の内容はこうなっていた。

―第111ギルド支部―

貴殿の奇抜な発想には相変わらず驚かされるものがある。

知らない人が読めばアイルーの事を考えた素晴らしい人と勘違いするかも知れないが、貴殿の事を知っている私達からすると、自分が楽をしたいが為に書いたとは思えない。

真剣にこの事を実現したいのなら、一度そのアイルーを連れてこちらに来るように。

追伸。アホな事を考えている暇があったら仕事をしろ！ 仕事を。モンスターは待っちゃくれねえんだよ！！

手紙の上の方は綺麗に整っている文字だったが、最後の“追伸”以降の文字は読みやすいという意味では綺麗だったが、上と比べると別人が書いたとしか思えない、大きさもまちまちの荒れた文字になっていた。

「楽、かニャー。ご主人の楽は何時もニャーに仕事を押し付ける事ニャ。今回のもそうなのニャね？」

「わたしにも」

「なんて事を言うんだ！　今回はちゃんとアイルーの事も考えた、素晴らしい案だったのに。書くのに三日も掛かったんだぞ！」

師匠が熱を込めてアル君に話し掛けたら、アル君は師匠の頭から降りて、向かい側の椅子に座った。

「ニャ。それでなんて書いたのかニャ？」

「わたちも、よみたい」

「よくぞ訊いてくれた。簡単に言うと、最近のオトモアイルー達は新米ハンターより強いだけではなく、ネコバアのしっかりした教育のお陰でモラルもある。なら、新米ハンターのように一人でクエストを受けれるようにしても良いじゃないか！　　っといった感じだな」

何時の間にか立ち上がった師匠は両手をひろげて固まり、アル君の反応を待っていた。

「……ニャーに一人で仕事をさせて、保証人とか、監督とかいう名目で報酬の一部を貰う気かニャ？」

「もう！　わたちも、よみたい！」

「何故バレた！？　ギルドに送った手紙にはその事を書いたが、今の説明ではあえて省略したのに！」

アル君は呆れた様子で頭を横に傾け、女の子は師匠の服を両手で掴み、両足で師匠の足を踏みつけて踏ん張っていた。師匠は左手を広げて顔を覆い、右手の人差し指を立ててアル君を指差した。

「最初に『樂をしようとしたが却下された』と言っていたニャ」

「よみたい！」

「しまった！ まさか答えを先に言ってしまったとは！？ 不覚」

アル君の指摘を受けた師匠はひざから崩れ落ちてよつんばいになったら、師匠にくつつくようにして師匠を引っ張っていた女の子が後ろに転び、それを心配したアル君が動く前に立ち上がった女の子は、泣くどころか素早く走りだして師匠の手か手紙を奪った。

「くっそ。俺のバカ」

「わーい。てがみ♪」

「ニャー。ご主人は相変わらずニャね」

師匠は握りこぶしを作って床を何度も叩き、アル君はどうせだからと師匠の背中に乗って座り、女の子は手紙を読み始めた。

「ニャー元氣を出すニャ。そして、仕事をするニャ」

「の、な、には、わらず、かされる、ものがある」

「なんて事を言うんだ、アル君は」

女の子は読めない所は飛ばして読んでいたので、意味の解らないものになっていたが、女の子は気にせず読み続けていた。

「お嬢様の事はニャーに任せて、たまには1人で狩りに行ってくるニャ」

「らない、が、めば、の、を、えた、らちい、と、いするかも、れないが」

「しかし、別に金には困ってないし……」

アル君が仕事を勧めてくるのに対して、師匠は頑張って仕事をしなくても大丈夫、という意味を込めてお金の事を持ち出した。

「アホかニャ！ さっきの手紙にも書いてあったニャ！ モンスタ―達は待つてはくれないニャ！」

「の、を、っている、からすると、が、をちたいが、に、いたとちか、えない」

「そうだろうが、俺1人が居ないくらい大丈夫だよ」

それでも大丈夫を繰り返す師匠。すると、アル君が飛び上がって師匠の顔の前に着地した。

「今は大丈夫かもしれないニャが、ギリギリかも知れないニャ！ ご主人が頑張ったらもっと平和になるニャ！」

「にこの、を、ちたいのなら、その、を、れてこちらに、るように」

「え……別に大丈夫だろ。手におえない古龍とかが来たら、流石に連絡が回ってくるだろうし」

あくまで大丈夫と言い張る師匠に、アル君は最終手段に入る事にした。

「そこまで言うなら仕方ないニャ。もう、ご主人にはご飯を作らないニャ」

「な、を、えている、があつたら、をしろ！ を。は、っちゃ、くれねえんだよ！！」

「なん、だと？ 俺を飢え死にさせる気か！？」

流石にビックリした師匠は起き上がり、両手でアル君を捕まえようとしたが、アル君はそれをスルリと回避して1歩離れた。

「ニャーは料理人としてここにいる訳ではないニャ。オトモアイルーとして来たニャ。料理を作るのはサービスニャ」

「よめた！ ぜんぶ、よめたよ。えらい？」

「ええ……」

アル君は胸をはり、女の子は「えらい？」と言いながら師匠とアル君を交互に引っ張る。師匠はあぐらを掻いて座り、頭を悩ます。

「さあ、どうするニャ！？……えらいニャよそれに比べて、ご主人はえらくないニャよ」

「わーい♪ ちちょーは、えらくないの？ わたちはえらいって！」

「ああ、うん。お嬢はえらいな」

女の子はアル君の横に並んで同じように胸をはり、師匠とアル君と交互に視線を送っては、胸をはり直した。

「ニャー！ 観念するニャ！」

「にゃー！ かんねん、するにゃ！」

「む……」

アル君が腰に片手を当てて、残りの手で師匠を指差したら、女の子もアル君のマネをして、同じポーズ、同じセリフをしゃべった。

それを見た師匠はどうとう観念したのか、立ち上がって武器部屋に向かった。

「ニャッハッハ。お嬢様のお陰でご主人に勝てたニャ」

「かんねん、するにゃ！　かんねん、するにゃ！　かんねん、するにゃ！」

アル君は笑いながら女の子の頭をなで、女の子はその間にも何かにいったのか、「かんねん、するにゃ！」を笑顔で繰り返していた。

「あゝそれじゃゝ出掛けて来るから、留守番よろしくゝ」

武器部屋から出てきた師匠は黄金に輝く鎧を着込み、何故か背中到大剣と槍、腰の後ろに片手剣、腰の両側に双剣、左手に大盾を持ち、右手には小盾を持っていた。

「ニヤ？　何をする気ニヤ？」

「かんねん、するにゃ！」

「討伐相手が決まってないからな、色々持って行くんだよ」

師匠は全身の鎧と武器のせいで歩く度に騒音を巻き散らかし、小盾を持った手で器用に扉を開けて外に出た。

「行ってらっしゃいニヤ」

「かんねん、するにゃ！」

「おう。てきとゝに頑張ってくるよ」

師匠は扉を閉めたら全力で走って行ったので、アル君が扉を開けて見送ろうとした時には、すでに見えない所まで行っていた。

「ニヤ。掃除でも始めるかニヤ」

「かんねん、するにゃ！」

アル君が掃除を始めても、女の子はしばらくの間は「かんねん、するにゃ!」を繰り返していた。

5、ギルド

（ご主人が久しぶりにニャーを置いて仕事に行ったニャ……）

「あそぼ〜よ〜」

アル君は師匠を見送った……正確には見送ろうとしたらすでに見えなくなっていたが、その後女の子の相手は置いておいて、家の掃除をしていた。

（今頃ギルドに着いたかニャー）

「あ〜る〜く〜ん〜」

女の子を完全に無視するアル君に対して、女の子はアル君の足を引っ張り、腕を引っ張りとしていたが、アル君はそれが幻とでもいうかのように、動きに乱れがなかった。

（ご主人と一緒に居ると常に面白い事があるからニャー。ニャーも一緒に行きたかったニャー）

「あっそぼ！ あっそぼ！ あ〜るくん、あっそぼ！」

アル君はテキパキと掃除を済ませていき、女の子は今や左手がアル君の尻尾。右手がアル君の右足を掴んでおり、アル君の動きに合わせて引きずられていた。

（今日はお嬢様と何をするかニャー）

「あそぼ〜……んっふ〜♪ もっと〜♪」

アル君は未だに女の子を引きずりながら部屋を移動しており、女の子はいつの間にか引きずられるのが楽しくなっていて、笑顔のま

ま引きずられながら足をばたつかせて続きを催促した。

（試しにアイルー語でも教えたら楽しいかニャー）

「とまっちゃ、だめでちょ！ もっと、あるきなちやい！」

アル君が止まって窓を拭き始めたら、女の子はアル君の尻尾を引っ張って可愛く怒っていた。

（相変わらずお嬢様は騒がしいニャー）

「うごけ！ うごけ！ うごくけ」

アル君は女の子の攻撃など気にせず、テキパキと窓拭きを終わらしたら移動を再開した。

（ご主人は何を狩ってくるかニャー……ニャむ……ギルドがご主人に依頼しそうなのは、最近ハンターを何組も返り討ちになっている火竜の夫婦かニャー……それとも、緊急事態が“何故か”起こってそれをおさめるニャね）

「ずるずる、ずるずる」

アル君は考えても答えが出るハズがないご主人の事に思考をさき、女の子は引きずられるのが楽しくて仕方ない、というのをあらわすように笑っていた。

...

ところ変わってアル君のご主人こと師匠は、ギルドが見える場所まで辿り着いていた。

「ずいぶん久しぶりだな。1人でギルドに来るのは」

始めからずっと走っていた師匠だったが、流石にギルドの建物が見えてからは歩き始めた。

「ふゝむ……そう言えばアル君は、お嬢の事をギルドにどう説明したんだろゝな」

歩きながら腕を組もうとした師匠だったが、両手に持っていた大盾と小盾がぶつかり、キンッ！と高い音を立てて弾かれた。

「あゝ忘れてたな。ギルドに行って何を受けるか決めたら、使わない武器を何処かに置かないとな」

両脇に木が立ち並ぶ砂利道をゆっくり歩いていたが、もともと近くなったからこそ歩き始めていたので、あっさりとギルドの扉まで着いた。

着いたには着いたが、そこはハンターズギルドの裏側で、裏口は在るものの、もちろんそこはギルド職員専用だ。

「あゝ……道間違えたか。前は正面に着いたんだがな」

仕方なく壁にそってぐるりと回り、ギルドの正面に向かう事にし

た。

「あゝ草がうざい。しかし、刈り取るのはめんどろだろ」

師匠は1人で文字通り独り言をいいつつ草むらを通り、ギルドの正面玄関まで着いた。

「どんな依頼が来てるかねろ」

師匠は師匠の提案で製作された“強力バネ付き！一般人は物理的にお断りだぜ！”と言う名前の硬い両開きの扉を押して中に入った。

「なんだ？ 珍しい」

一般人では絶対に動かない扉を難なく開けて中に入った師匠だが、ギルド内にあまりにもハンターが居たので、入り口で止まって右へ左へと視線を動かした。

ギルド内は簡単に言うと長方形をしており、入り口は長い底辺の真ん中で、上辺真ん中にギルドカウンター。左右に四人がけのテーブルが二つずつあり、合計四つ。普段はスカスカの十六個の椅子がほとんど満員になっていた。

「何かあったのかたまたまか……」

師匠がこの状況をギルド嬢に訊こうと思ってカウンターに向かうとしたら、横から近付いてきた重装備のハンターが話し掛けてきた。

「おお、同士よ！ やるじゃねえか！」

全身グラビモス装備に包まれたハンターは、師匠の肩に馴れ馴れしくくつついてきた。

「誰が同士だ。この変態」

顔は見えないが、誰か分かった師匠はグラビハンターの腕を払い、ついでに腹に蹴りを入れた。

「ぐは！ 何をするんだ同士よ。照れなくてもいいんだぞ！」

師匠の蹴りで地面に手を着いたグラビハンターだが、すぐに復活して今度は師匠の手を捕ってきた。

「触んな、ロリコン」

師匠は師匠で手を取られたのを利用して、今度はグラビハンターを壁まで投げ飛ばした。

「ぐっは〜！？」

流石に今度のは効いたのか、グラビハンターは起き上がってこず、倒れたまま声を上げた。

「どうしたんだ、同士よ……ギルド嬢から聞いたぜ？ 小さくて可愛い女の子を自分好みに育ててるって」

「な！？」

師匠はその言葉に即座に反応し、ギルド嬢に視線を移して睨み付けた。

「はゝい。どうしたのかしら？　可愛い女の子を育てているのは本当でしょ？」

ギルド嬢は師匠の睨みもなんのその。まったく変わらぬ笑顔で手を軽く上げた。

「誤解を招く言い方をしないでくれ！　うちのネコからは何て報告が来たんだ！？」

師匠はカウンターに走って近付き、ギルド嬢に詰め寄った。

「そうね。確か『ニャーくらいの大きさの女の子を拾ったニャ。頑張って育てるニャ。場所は今行った村ニャ。女の子は怪我していたから近いご主人の家に連れて帰って治療中ニャ……たぶん』だったかしら」

「……何である変態はあんな事を口走ったんだ？」

「さあ？　みんなには貴方が女の子を拾って育ててる。としか言っていないわよ」

「むう……」

師匠がまた腕を組もうとして両手の盾をぶつけて唸り、とりあえず変態にトドメを刺そうとグラビハンターに向かって一歩足を出したら、ギルド嬢が声を出したので止まって振り返った。

「あと」

「あと？」

「今日はハンターがいっぱい居るでしょ？」

「……居ますね」

師匠はギルド嬢の言いたい事を考えてみたが、思い付かなかった
ので無難な返事を返しておいた。

「何で分かる？」

「………分かりませんね」

師匠の方をじっと見詰めるギルド嬢の視線から逃れるように、師
匠は他のハンター達に目を向けてみた。

師匠が視たところ、今居るハンター達の実力を上中下の三段階に
分けたら、上のハンターが1人。中のハンターが八人。下のハンタ
ーが四人。

実力的には火竜夫婦ならなんとか、古竜なら上ハンター以外全滅。
つといった実力だと師匠は判断した。

「あのね……」

こっちを見ない師匠の肩を、腰の後ろから取り出した包丁の刃の
無い方で叩き、師匠がこっちを見たのを確認したギルド嬢はニコリ
と笑って続きを話した。

「近くの森にクシャルダオラが出たらしいのよ。ちょうどいいから、
貴方が頑張ってくれないかしら？」

「ノーて有りかな？」

「今の段階じゃあまだ強制は出来ないわ。ただ…」

「ただ？」

「貴方が行かないのなら、私は貴方と女の子についてあること無いこと言いふらしちゃいそうよ」

それを聞いた師匠はとても嫌そーな顔をしたが、グラビハンターを見て諦めた。

「はあ。分かつよ。行ってくるから依頼書ちょうだい」

ギルド嬢は両手を胸の前で組んで大変嬉しそうにしたら、普通は棚にあるハズの依頼書を腰辺りから取り出し、師匠に押し付けた。

「まあ、ありがとう♪ 貴方なら行ってくれと信じていたわ」

師匠は押し付けられた依頼書に必要な事項を書き込み、契約金を乗せてギルド嬢に返した。

ギルド嬢は依頼書にハンコを押したら棚に仕舞い、手を振って師匠を見送った。

「行ってらっしゃい」

「……いつてきます」

師匠は肩を落としてギルドを後にした。

6、クエスト後

疲れた……今師匠から出る言葉はそればかりで、多少言い方を変えつつも結局のところ“疲れた”を意味する言葉を延々と繰り返してギルドへの道を歩いていた。

「つくかくれ〜た〜」

現在師匠は道なき道、森の中をまっすぐ進んでおり、その理由は「森の中をまっすぐ突っ切ったらすぐに着くんじゃね?」と言う師匠自身の案であり、今はそれを後悔しながらも今更戻るのも格好悪いので、疲れた疲れた言いながらも頑張っって歩いているところだった。

「まだか…まだだ! マジで!? マジだ!」

疲れたつつも暇な師匠は1人2役をしながら会話(?)をし、少しでも気をまぎらわそうとして1人奮闘していた。

「ぜえーはあ〜ぜえーはあ〜……隊長! 私の体調がすぐれません! 休憩を進言します!」

『却下だ! ぜえーはあ〜ぜえーはあ〜……俺だって休みたいがもう食料はほとんど無い! 速くギルドに辿り着かないとまかない料理すら口に出来ないぞ! 走れ!』

とうとう師匠は声まで変えて二人役をし、自分自身で叱咤激励を始めた。

「了解です。隊長! 私も速く美味しい食事が食べたいです!……ふう〜はあ〜ふう〜はあ〜」

『よし！　ならとっとと走れ！　日が落ちてきたぞ！！』

師匠は疲れる原因の1つである1人芝居を大声で続けながら走り出した。

「はっはっふうっはっはっふう……隊長！　いまだにギルドの影も形も見えません！　道は本当にこっちで良いのでしょうか？」

『安心しろ！　ふひいっはひい……方角が間違っていれば左右にあった道に飛び出すハズだ！　綺麗な道に出ないと言う事は道を、ぜえーはあゝ間違えていないと、ぜえーはあゝ言う事だ！』

師匠は道なき道とは思えない程に高速で森の中を走り、左右に視線を巡らせたがどちらに視線を動かそうが見えるのは木＋木＋木＝森のみだった。

「隊長！　前方に森の終わりが見えます！　ギルドでしょうか？」

師匠は右腕を伸ばして森の終わりを指差し、後ろを振り返った。

『よし。よくやった！　ギルドが近いかはまだ分からないが、やっ
と森を抜けられるぞ！　ラストスパートだ、走れ！』

師匠は腕を下ろし体を戻し、更に加速して森の終わりを目指した。

「うおおおー！」

『うぬぬぬうう！』

そして、その超スピードを保ったまま師匠は森を抜けて“空”に身を投げ出した。

「やったー！……え？」

運が悪いと言うのか、森の終わりの先は崖になっており、師匠はもはや取り返しのつかない空中にいた。

「た、隊長！？ 我々は空を飛んでいます」

『そんなもん見れば分かる！ 何とかしろ！』

落下しながらも師匠の1人芝居は続いていた。

「隊長！ まだ私は死にたくありません！ 助けて下さい。隊長！」

『俺だって死にたくない！ しがみつくな！ 諦めろ！ 俺達に出来る事はもはや何もない！ 神にでも祈るんだな』

「そ、そんな……神様髪様紙様！ どうか私だけでもお助け下さい！」

『おい、コラ！ そこは「我々をお助け下さい」だろうが！？ なに1人だけ助かろうとしてるんだ！』

無駄に師匠が頑張っているうちに地面が近付き……

「うわー！ もうダメだー！」

『おお神よ。御許へ導き（みもと）（みちびき）たまへ…』

そして、師匠は地面に難なく着地した。

「あゝ疲れた……暇潰しにはなったかな」

数十メートルはあった落下だったが師匠はなんともなっておらず、

あくびをしながらのんきに歩いていた。

「ふぁゝああ。本当に疲れたな。さっき空中に出た瞬間にギルドが見えたからな、あと少しあと少しと」

師匠はゆっくりと走りだし、さっきと比べたらかなり遅いが、それでも一般人では追い付くのが困難なスピードで走っていた。

「おお!? まさかの先客か!」

師匠がギルドの入り口を見ると、二人のハンターが二人がかりで扉を……「強力バネ付き。一般人は物理的にお断りだぜ!」を頑張っ
て開けようとしていた。

「くそ。硬い! 本当に鍵がかかってないんだよな?」

「お、俺に訊かれたって分かん」

二人のハンターは両開きの扉の片方に二人で当たっていたが、ビクともしていなかった。

「朝はもっと、軽く、なかったか?」

「そう……だな!」

二人のハンターは息を切らし、顔を真っ赤にしながら頑張っていたが、扉は少しも動いていなかった。

師匠はバレないように見ていたが、いい加減お腹がすいたので二人を無視して中に入る事にした。

「失礼します」

師匠は二人の新人ハンターが、右側に二人で頑張ってビクともしないのを尻目に、簡単に左側の扉を開けて中に入った。

「え？」

「はあゝ!？」

師匠は新人ハンターの声を見殺しして扉を閉めた。

（「開いた!？ まさか右側は開かないのか？ よし。左側を頑張るぞ！」）

（「オーケー。行くぞ！」）

ギルドの中に居るのはカウンターにギルド嬢と、扉の近くに新人じゃないハンターが二人立っていた。

二人の新人じゃないハンターは扉を見つめており、とても楽しそうな顔をしていた。

「どもども」

師匠は二人のハンターを見殺ししてカウンターに向かい、ギルド嬢に依頼の達成を伝えた。

「クシャ終わったぜ」証拠は明日の朝には着くと思うから、とりあえず飯をくれ」

「あら、ありがとう。ご飯だけど、ただ飯と高い料理のどっちがいいかしら？」

ギルド嬢の案に対し、師匠はミジンも考えずに即答した。

「うまい方で」

「ふう、仕方ないわね。どこでもいいから座って待ってるのよ」

ギルド嬢は奥に引っ込み、師匠は右側にある四人掛けのテーブルに座った。

「あああゝやつとまともな飯が食えるうゝ……アル君の偉大さがよく分かるクエストだったぜ」

初めは姿勢正しく座っていた師匠だったが、食事前に武器等を触る訳にはいかないうから暇だったので、何かがありそうな入り口に目を向けた。

（「開かねえ。どうする？ 俺は諦めて助けを呼びたくなってきたぞ？」）

（「しかし、朝は開けたしな。実は先輩が後ろを押さえているんじゃない？」）

どうやら新人ハンターはいまだに中に入れていないようで、入り口辺りからボソボソと話し声が聞こえていた。

ちなみに、先輩ハンターと思われる二人は別に扉を押さえるイタズラ等はまったくしておらず、入り口の扉から数歩離れたところで雑談をしながら扉が開かれるのを待っていた。

「あっはっはっは。諦めの悪いヤツラだな」

「そうだな……」

「ふうん」

入り口付近の状況は少しも進展していなかったので、入り口から視線を外した師匠は二人掛けの椅子に寝転がった。

「お腹空いた〜…」

（「もう諦めようぜ。俺達が一人前にはまだまだなのが良く分かったよ」）

（「……そうだな。センパイ。開けて下さ〜い」）

「お、ようやく諦めたか。それでは先輩の凄いところを見せてやるか」

「頑張れ」

師匠が寝ながら飯を待っていたら、とうとう湯気のたつ山盛りの料理をギルド嬢が持ってきた。

「はい。出来たわよ」

「おお！ いただきます！」

料理が届いた瞬間に師匠は跳ね起き、両手を合わせて「いただきます！」と言ったら、凄いスピードで食べ始めた。

「う〜む。うまい！ 細かいところなんて少しも分からないが、とにかくうまい」

「あらあら、ありがとう。料金の方は報酬から引いておくわね」

ギルド嬢はそう言ったらカウンターに戻り、そのギルド嬢に対し

て師匠は左手を素早く鋭く上げて返事をした。

「了解……あと、ごちそうさまでした」

あつと言う間に山盛りの料理を食べ尽くした師匠は、空の皿を持つて立ち上がりカウンターに置いた。

「相変わらず食べるのが速いわね。私ではとても真似出来ないわ」

「まあ、得意技の1つだな。それじゃ寝るんでまた明日」

「お休みなさい」

師匠は入り口から見て左斜めにある階段を、手を振りながら登って行った。

「先輩！ この扉どうなっているんですか？ ビクともしないんですが！？」

「そうですよ。朝は何とか開けたのに……」

「なあ」

「なんだ？」

「お前、わざと言ってなかったな？」

「そう言うお前も、言ってなかったんだろ？」

「「？」」

新人二人の頭に「？」が浮かぶなか、先輩二人の話は続く。

「当たり前じゃないか。言ったらつまらないだろう？」
「そうだな。一回こっきりだしな」

「先輩？」

「……？」

「実はな……」

「「実は？」」

「この扉はな、暗くなったりしたら硬くなるんだよ」

「え？」

「はあ？」

「ちょ、先輩！　きいてませんよ！」

「ひどいですよ、先輩！」

「だって、なく？」

「そうそう。これはこのギルドの伝統だぜ？　朝を1人で簡単に開けたら一人前。夜を1人で簡単に開けたら一流だ」

「しかし！」

「ひでえ……どんな扉だ！　だれが作った扉だよ？」

「それはな……」

夜がふけていく中、1人のハンターは眠りにつき、四人のハンター

Iは長々と話しを続けていた。

7、久しぶりのマイハウス

師匠は現在ギルドの依頼を多数達成し、なんとか家に帰れるようになった時にギルド嬢が進めてきた“お土産”に嫌な予感がしたので断り、家路についていた。

「久しぶりに家に帰れるなく。お嬢が俺の事を忘れてたりしないかが心配だ」

師匠は行きと同じように森の中を走る。

全身に着けた武器の数々が鎧に当たり、結構な音を響かせているのを気にせずに全力で走る。

今回大量の依頼を受けた師匠だったが、普段なら今回受けた依頼の半分も受けなかっただろう。

何故今回は大量にギルドからの依頼を受けたかというと、師匠が女の子を拾って家に置いているのを知ったギルド嬢が、放って置いたら“もしかしたら”師匠の家に被害が行くかも知れない依頼に絞る、師匠にその事を伝えて押し付けたからだった。

その代表例が古龍種になる。

古龍種のお大半は普通の飛竜種を遥かに凌駕する機動力と破壊力を持っているので、“もしかしたら”の範囲もかなり広い。

お陰でこの付近で見つかった古龍種全てを任される。という無茶ぶりをギルド嬢から押し付けられたが、さすがに数件は信頼出来るハンターに師匠が押し付け、討伐、または撃退してもらった。

「はあ、長かった……アル君のご飯を早く食べたい……」

家に着いた師匠が扉を開けると、入口正面にあるテーブルにお嬢とアル君が仲良く座っていた。

「ただいま！ アル君ご飯をよ・こ・せ！」

「お帰りニャー。ご飯は少し待つニャー！」

「ちちよう！ おかえりー」

師匠のただいまに対して、アル君は返事を返したら椅子からおり、台所へ走っていった。

女の子はアル君と同じように返事を返したら椅子からおり、師匠に向かって走っていった。

「お嬢〜。ただいま〜」

師匠は片足を曲げて床にひざをつき、両手を広げてお嬢を待ったが、女の子は師匠の手前で止まって両手を差し出してきた。

「はい、ちちよう」

「……………はい？」

女の子は両手で水をすくうような形をした、何も乗っていない両手を師匠に差し出し、何かを期待する目を師匠に向けた。

師匠はお嬢の何も乗っていない両手を見つめて止まり、意味が分からないのでアル君に助けを求めて探したが、アル君は台所に引っ

込んでご飯の用意をしているのを思い出し、再びお嬢の両手に視線を戻した。

「あゝうゝん？」

師匠は適当なうなり声を上げながら考え、なん通りかの答えを予想して、どれが当たりか急いで吟味した。

―師匠の予想とそれの場合の対応―

1、ままごとをしていたので、師匠に見えないご飯を進めている。
「いただきます」と言って食べたふりをする。

2、さっきまで持っていた何かを進めているつもりだが、いつの間にか無くしていたのに気が付いていない。

「ありがとう」と言いながら、両手の上の物を取ったつもりになる。

3、おかえり↓お土産ちょうだい。
何でも良いので、何かを両手に乗せる。

4、両手には深い意味がない。
スルー。特にやらねばならない事が思い付かない。

色々考えた師匠だったが、どれも失敗したら機嫌をそこねそうなので、ごまかす事にした。

師匠はお嬢の両手を無視して両脇に手を入れて持ち上げ、高い高いをしながらその場で回転し、一周回って床に下ろした。

「もっと」

「え？」

床に下ろされたお嬢は両手を広げて跳びはね、ドンドンと激しい音を上げていた。

「もう、いっかい。ぐるっと」

「さっきの？」

お嬢は何度も頷き、両手を広げて待つ。

師匠がもう一度持ち上げたらお嬢は笑顔になり、両手を横に広げる。その状態でもう一度回転して床に下ろした。

「あははは！ もう、いっかい」

床に下ろしたお嬢はピョコピョコ跳びはねドンドンと床を足で叩き、両手を広げて回転の催促。

「はいはい」

師匠がお嬢を持ち上げて回転すると、声を上げて笑うお嬢。

「あははは♪」

回転が終わって床に下ろすと、お嬢はピョンドンピョンドン。

「もう、いっかい」

そして、お嬢の催促は止まらない！

「はいはい…」

師匠は少し嫌になってきたが、もう一度持ち上げ回転。

「んっふっふ」。もう、いっかい」

まだまだお嬢は飽きない！

「はーい……………」

師匠は飽きた！　が、ご飯が出来るまでは相手をすると割りきって頑張る。

しかし、身体的にはともかく、精神的にはとっくにお疲れの師匠がアル君はまだかと台所の入口に目を向けると、アル君が体を隠しながらこちらの様子をうかがっていた。

それを発見した師匠は、アル君を睨み付けてアイコンタクトを送る『助ける！』

アル君はニツコリ笑ってアイコンタクトを返す『頑張るニャ！』

それに師匠はイラっとしながらも、お嬢にはばれないように笑顔を維持。その時、お嬢の顔の一部が赤くなっているのに気が付いたので、その事について訪ねてみた。

「お嬢？　顔が赤いがどうしたんだ？」

師匠はお嬢の赤くなっている部分……ほっぺたの上の部分を実こ
うとして人差し指を近付けたら、お嬢に手を叩き落とされた。

「だめ！　ここはね、やけどしてるの。さわったらいたいから、さ
わっちゃ、だめ！」

「な！？」

それを聞いた師匠は、アル君に向かって殺気を込めて睨む。その
時瞳に込められた意味は『どういう事だコラァ！　コ・ロ・ス・ぞ
！』

睨まれたアル君はブンブンと風が起こる程の速さで首を横向きに
振り、抗議の声を上げた。

「違うニヤ違うニヤ！　誤解ニヤー！　それは火傷じゃニヤくて日
焼けニヤー！」

お嬢はアル君の声を聞いたら笑顔で振り向き、また前を向く。

「ちちよう。ひやはね、やけどなんだよ。だから、いっぱいひや
けちたら、やけどになるの。いたいいたいになるの」

それだけ言ったお嬢は胸を張り、何故かとても自慢顔。

その自慢顔をよく見ると鼻の頭も赤くなっており、おそらくこれ
も日焼けだろう。

「ふーん？　日焼けは顔だけ？」

「ちがうよ？　あのねあのね」

そういったお嬢は右腕の裾をめくる動きをしたが、両腕ともに初めから半袖だ！

そして、見えない袖をめくったお嬢は右腕を伸ばし、何故か師匠の腹にパンチした。

「ぐはあ！」

師匠は鎧を着たままなので痛い訳はないのだが、大げさにリアクションをとった。そして、お嬢には無視された。

「ほら、ここ、あかくなってるの。やけどしてるの。おふろはいったら、いたいいたいになるの」

お嬢は右手を師匠の腹に……正確には腹のある位置の鎧に当てたまま、左手で右腕の赤い部分を指差し、痛がっている顔をした……が、すぐに笑顔に戻った。

「へー、腕も赤くなってるな」

師匠がお嬢の赤くなっている腕を見ていたら、ようやくアル君料理を持って台所から出てきた。

「出来たニャー！ ご主人は今すぐ食べるニャー!?」

ガシャンと派手な音を立ててテーブルに料理を投げ乗せたが、料理が少しもこぼれない、見事な技になっていた。

「食べるぞー！」

師匠はお嬢を回転しながら飛び越え、テーブルの前に着地したら静かに座って手を合わせた。

「いただきます！」

師匠は両手をパンッと叩いたらすごいスピードで食べ始め、大人1人分の料理をものの十数秒で食べ尽くした。

「あゝうまい。まったく。アル君の料理が美味し過ぎるから、自分で作った料理が中途半端で仕方なかったよ」

師匠がアル君の料理を綺麗に食べ尽くすと、アル君がすぐに皿を回収して台所に向かったら、お嬢がアル君の後を走って追いかけて行った。

「あるくくん。私たち、てっだうよ」

アル君とお嬢の二人（？）が台所に消えるのを見届けた師匠は腰を上げ、武器庫に向かって歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372r/>

モンハンほのぼの話

2011年10月7日00時46分発行